

# 言語類型論の英語教育への応用の試み

小 高 裕 次

## 1.はじめに

「言語類型論(以下、単に類型論と呼ぶ)」とは、広く世界の諸言語を比較することによって言語の様々なレベルにおける相違点や共通点を明らかにし、自然言語に見られる特徴を理論的に説明しようとする言語学の一分野である。したがって、この分野の研究によって得られた知見は、言語教育の分野にも効果的に応用できると考えられる<sup>1)</sup>。

本稿では、高校英語 I における「感情を表す動詞」の指導を例にとり、類型論的視点の英語教育への応用の可能性を探ってみたい。

なお、本稿を執筆するに当たって、以下の四つの検定教科書およびその教師用指導書を参照した(以後括弧内の略号で表す)。

The New Age English I, 研究社, 1994, (NAE)

CREATIVE English Course I, 第一学習社, 1998, (CRE)

PROGRESSIVE English Course I, 尚学図書, 1998, (PRO)

PHOENIX English Course I, 開隆堂, 1999, (PHO)

## 2.感情を表す動詞の二つのタイプ

感情を表す動詞は、日本語を母語とする英語学習者にとって極めて修得しにくい文法項目の一つであろう。

感情を表す動詞は、「感情の持ち主」と「対象」の二つの項からなっている。この二つの項の順序には、次のような二つのタイプがある。

(1) a. 「感情の持ち主」 + 動詞 + 「対象」

He likes it.

b. 「対象」 + 動詞 + 「感情の持ち主」

The game interests me.

本稿では、便宜的に前者を「aタイプの動詞」、後者を「bタイプの動詞」と呼ぶことにする。

この二つのタイプの動詞のうち、学習者にとって問題となるのはbタイプの動詞である。

b タイプの動詞を用いた能動文において、主語と目的語を混同する例がよく見られる。

(2) The opening of the park surprised many people,<sup>2)</sup> since there was already a popular park designed by George Lucas in Walt Disney World. (PRO L.6)

(2)の例の場合、many people が主語であると誤解する学習者が非常に多いのである。

また、b タイプの動詞は、"I am interested in the game."のように受動態で用いられることも非常に多い。b タイプの動詞が受動態で用いられる場合は、英文を解釈する際には問題が少ない(ただし、受動文であるとの意識は薄いようであるが)。しかし、英作文の際に be 動詞を忘れる傾向が強い。例えば、「彼女は怯えていた。」She was scared. という文を作らせようとする、\*She scared. のような誤りを犯すことが多い。

さらに、名詞修飾語として用いられる現在分詞と過去分詞の意味の区別ができないことも多い。例えば、the excited people 「興奮した人々」と the exciting people 「刺激的な人々」の区別がつかない。この例であれば、両者とも「興奮した人々」と意味にとってしまう傾向が強いようである。

### 3. 検定教科書における指導法と問題点

検定教科書の指導書では、感情を表す動詞に対してどのような指導法を考慮しているだろうか。

#### 3.1. テキスト中に見られたbタイプの動詞の例

1. で挙げた四つの教科書のテキスト本文中で用いられている b タイプの動詞は、annoy, bore, confuse, excite, disappoint, frighten, interest, move, please, remind, scare, shock, surprise, tire, worry の 15 種であった。動詞毎の用例を、述語動詞・過去分詞(補語としての用例および修飾語としての用例)・現在分詞(補語としての用例および修飾語としての用例)・名詞的用法・その他に分けて、次頁の表に示した。

b タイプの動詞全体の使用例はのべ 116 例であった。平均すると一つの教科書で 29 例、一課毎の平均ではおよそ 2 例前後である。学習者が b タイプの動詞に出会う頻度は、決して少なくないといえる。

#### 3.2. 教科書および指導書におけるbタイプの動詞の扱い

今回取り上げた検定教科書では、b タイプの動詞をひとまとめにして取り扱うということは考慮されていないようである。そのため、特に現在分詞形や過去分詞形に対する取り扱いは、形態素毎、教科書毎に異なっている。

NAE では、

(3) They cry when they have been worried about something but find out everything is all right. (NAE L.7)

という文に対して、「worried は形容詞」という説明が見られたが(指導書 p.108)、

表.

	述語動詞	過去分詞 (補語)	現在分詞 (修飾語)	名詞	その他	合計		
annoy	1					1		
bore		6	4	1		11		
confuse	2		1	1		4		
excite		6	1	2	1	10		
disappoint		1				1		
frighten	3	1	1			5		
interest	1	9		3	4	21		
move <sup>3)</sup>	2	1				3		
please <sup>4)</sup>	3	3			1 <sup>5)</sup>	7		
remind	1	1				2		
scare		3				3		
shock		3		1		4		
surprise	3	6		6	4	19		
tire		11				14		
worry	6 <sup>6)</sup>	7			1 <sup>7)</sup>	14		
合計	17	62	2	18	7	8	2	116

(4) Adults who watched E.T. were reminded of the importance of believing in your dreams.

(NAE L.6)

という文に対しては、「When adults watched E.T. it reminded them of the importance of believing in your dreams. のように能動態にすると、remind sb of sb/sth の構文を指導しやすい」(同 p.94)という説明を行っていて、ここでは remind はあくまでも動詞として扱われている。

CRE では、confuse に対しては、confused, confusing という分詞形が共に新出語彙として欄外に記されていたが、annoy, shock については、どちらもテキスト中で annoyed, shocked という過去分詞の形で使用されていたにもかかわらず、欄外には annoy, shock の形で示されていた。PHO でも同様に、shock は受動文で用いられていながら見出しは shock であったが、exciting は形容詞としてそのまま欄外に示されていた。

さらに PRO の場合は、

(5) "It's going to be boring anyway," I told him. (PRO READING FOR FUN 1)

では boring が exciting や frightened と同様、欄外で「-a.」という表記を付けられて、形容詞であることが強調されているのだが、

(6) I'm so bored. (PRO READING FOR FUN 3)

では、欄外には「bore(d)」とあるのみで、動詞 bore の過去分詞として扱われている。

### 3.3.問題点

前節で見たように、検定教科書ではbタイプの動詞を個別に扱い、特に範疇化することはしていないようである。したがって、学習者は本来の動詞と現在分詞形・過去分詞形をそれぞれ別個の単語として覚え、さらに受動文をイディオムとして覚えなければならない。これは、非常に効率が悪いのではないだろうか。

四つの教科書のうちPHOだけは、各課の末尾に設けられた "Expand Your Vocabulary" のコーナーで b タイプの動詞の分詞形を取り上げ、「例にならって、次の「心理状態」を表す動詞の-ed形と-ing形の形容詞を選んでみよう。また、その意味の違いを確認しよう」という設問を設けており、この点については評価できる。しかし、やはり「形容詞」という表記ではなく、分詞の修飾的用法であることを強調するべきではないだろうか。

## 4.類型論的観点からの説明

2.で述べたような、感情を表す動詞に見られる諸現象が起こる原因は、以下のように説明できる。

### 4.1.他動性

まず、感情を表す動詞の項のとり方が a・b 両タイプに分かれるのは、他動性の低さに起因する。

角田(Tsunoda 1981,1985, 角田 1991)は、世界の諸言語の二項述語の格枠組みを調べて、1類・直接影響>2類・知覚>3類・追求>4類・知識>5類・感情>6類・関係>7類・能力 という述語の分類を提案した。数字の小さい類ほど他動性が高く、数字の大きなものほど他動性が小さい。ここで角田が言う「述語」とは、「大まかにいって、動詞、形容詞など」を考慮に入れたものであり、「日本語の場合には、形容動詞も含まれる」という範囲の広いものである。

1類「直接影響」の述語とは、英語の kill、日本語の「殺す」のような動詞である。これらの動詞は、その動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。いわば「原型的他動詞」である。英語ならば I killed him.のように主格-目的格という格枠組みをとり、日本語ならば「私が彼を殺した」のようにガ格-ヲ格という格枠組みをとる。

一方、7類「能力」の述語として、角田(1991)は英語の good, capable, proficient や日本語の「できる」「得意」「強い」「苦手」という例を挙げている。これらの述語は1類の述語とは異なる格枠組みをとりやすい。例：

(7) I am good at English.

(8) 私が英語が得意だ(ということ)

上の例であれば英語の方は主格－前置詞 *at* という格枠組みをとるし、日本語の方はガ格－ガ格という格枠組みをとる。

感情表現は、角田の分類の5類に当たり、形態素によって、原型的他動詞と同じ格枠組みをとることも、その他の格枠組みをとることもある。例：

(9) *I like baseball.*

(10) 私が野球が好きだ(ということ)

この例では、英語の方は主格－目的格という原型他動詞と同じ格枠組みをとるが、それに対応する日本語ではガ格－ガ格という格枠組みをとる(ただし、この例ではガ格－ヲ格も可能であるが)。逆に、

(11) *I am afraid of dogs.*

(12) 私は犬を恐れる

という例では、英語の方は主格－前置詞 *of* という格枠組みをとるが、対応する日本語ではガ格－ヲ格という原型他動詞と同じ格枠組みをとる。

上記の **b** タイプの動詞は、格枠組みこそ原型的他動詞と同じであるが、感情の持ち主が対格で現れ、対象が主格で現れるところが **a** タイプの動詞とは異なっている。これに似た現象は、日本語でも7類の動詞などに現れる。例えば、

(13) 英子に逆上がりができる(こと)

という例では、ニ格－ガ格という格枠組みをとり、「対象」の方がガ格をとる。

#### 4.2. 有生性と定性

次に、**b** タイプの動詞が受動態になりやすいのは、名詞句の「有生性」と「定性」という観点から説明できる。

名詞句には、大まかに言って人間>動物>その他の名詞という階層がある。この階層の左側に行くほどその名詞句の「有生性が高い」と言い、右側に行くほど「有生性が低い」と言う。名詞句の有生性は諸言語における統語上の様々な現象に関与することがある。例えば、英語ならば人間名詞のみが代名詞 *he*, *she* に置き換えられ、動物およびその他の名詞は *it* で置き換えられる。また、日本語では人間および動物名詞には動詞「いる」を用い、その他の名詞には「ある」を用いる。

定性も同様に、統語上の様々な現象に関与している。例えば、名詞句の定性の違いによる冠詞 **a** と **the** の使い分けは、英語教育の最も初期の段階で教えられる。また、不定の名詞句の存在について言及する場合、例えば、「庭に猫がいる」という日本語の文に対応する英文では、

(14) *A cat is in the yard.*

という文も非文法的とはいえないが、

(15) *There is a cat in the yard.*

という形の方がより好まれる。

そして、名詞句の有生性と定性は、その名詞句の「主語になりやすさの度合い」とも関連している。例えば、

(16)トラックが少年をはねた。

(17)少年はトラックにはねられた。

という二つの文では、(17)の文の方がより自然である。「少年」と「トラック」では、少年の方が明らかに有生性が高いからである。一方、

(18)誰かが彼女を誘拐した。

(19)彼女が誰かに誘拐された。

という二つの文では、不定である「だれか」を主語にした(18)の文よりも、定である「彼女」を主語にした(19)の文の方が自然である。

b タイプの動詞では、感情の持ち主と感情の対象という二つの項があるが、両者を比べた場合、感情の持ち主の方が有生性あるいは定性の度合いが高い場合が非常に多い。そのため、受動文にすることによって感情の持ち主を主語にする方が自然なのであろう。実際、テキスト中でbタイプの動詞が能動文として用いられていたのは、bタイプの動詞が関係節中に用いられている(20)や(21)のような例をのぞけば、(22)－(24)の三例に過ぎなかった。

(20)How about choosing a story which may interest girls this time?(PHO.L6)

(21)I'm wondering which one will please them most.(同上)

(22)Nothing much can surprise them.(CRE.L4)

(23)The opening of the park surprised many people, since there was already a popular park designed by George Lucas in Walt Disney World.(PRO.L10)

(24)The desperate look of the refugees had moved her.(PRO.L11)

#### 4.3.修得が困難な理由

日本語では、語順や副助詞「は」によって様々な主題化が可能である。しかも、有生名詞は主題化されやすい傾向にある。例えば、

(25)a.僕に英語ができる。

b.僕は英語ができる。

(26)a.僕が魚が嫌いだ。

b.僕は魚が嫌いだ。

という二組の文において、(25)は二格－ガ格、(26)はガ格－ガ格という格枠組みをとるが、両者とも、有生性の高い「僕」を主題化した(25)b・(26)bの方が自然な文である。

そのため、こうした他動性の低い述語の格枠組みが原型的他動詞文の格枠組みと異なっても、日本語を母語とする学習者には意識されにくいようである。

## 5. 英語教育への応用

では、実際の英語教育の現場で、以上のような類型論的観点から得られた知見をどのように応用すればよいだろうか。以下に、筆者が実際に試みているやり方を示す。

### 5.1. 実際の指導

まず、動詞によっては原型的他動詞とは異なる格枠組みが出ることを教える。具体的には、感情を表す一部の動詞において感情の持ち主が目的語になり、感情の対象が主語になるという事実を示すのである。その際、ガ格ーガ格構文やニ格ーガ格構文など、日本語にも同様の現象があることを知らせ、このような現象は世界の諸言語でも普通に見られることも合わせて説明する。ただし、それが他動性の高低によるものであるという点については、一応の説明はするものの、さほど強調しない。

次に、有生性や定性が低い名詞句は主語にはなりにくく、そのため感情の持ち主を主語にした受動文になりやすいことを教える。「人間を中心にして物事を考える方が自然だ」というような表現で十分である。

過去分詞・現在分詞の修飾用法については、事前に徹底させておく必要があるが、上記のような説明を行えば、混乱も比較的少ない。

また、fond (<M.E. fonnen) や afraid (<M.E. affray) など、元来は動詞の過去分詞であったものが、動詞そのものが使用されなくなったために、現在では形容詞として扱われている形態素にも簡単にふれ、b タイプの動詞と共通する点も多いという事実を合わせて説明しても良いかもしれない。

### 5.2. 類型論的視点導入の効果

類型論的視点を取り入れた以上のような教授法には、次のような利点があると考えられる。

第一に、これまでイディオムとして個別に教えていたそれぞれの動詞を「b タイプの動詞」として一つの範疇にまとめることによって、学習の機会が増加するという点が上げられる。それぞれの語の出現回数は、3.1. で示したように、一回からせいぜい五回程度である。しかし、「b タイプの動詞」全体として考えるならば、各課毎に二回は出会う計算になる。出現頻度が多くなれば、当然定着しやすくなる。

第二に、日本語と英語の相違点と共通点を際立たせ、場合によってはそれ以外の言語に見られる現象をも紹介することにより、学習者の興味をひくことができ、学習者の記憶に残りやすくなる。特に、英語以外の言語の例は、学習者が興味を持ちやすいようである。

第三に、仮に他動性や有生性・定性などの概念を理解できなくても、現象の背後に何かしらの理由があると知るだけでも、学習者を安心させる効果があるようである。

## 6. おわりに

高等学校における英語教育に求められているのは、単に英語に習熟するという実用的な

側面だけでなく、外国語を学ぶことによって自らの母語である日本語についても見識を深めるという教養としての側面も含まれているはずである。言語類型論は、そうした外国語学習の教養的側面を満たしながら、同時に実用的側面の強化もできる有効なツールである。

## 注

- 1) 角田(1991)は、日本語教育に類型論の研究成果を応用するためのいくつかの例を提案している。
- 2) 下線は筆者。以下全て同じ。
- 3) 「感動させる」の意味のみ。
- 4) 「喜ばせる」の意味のみ。
- 5) to 不定詞。
- 6) 全て自動詞。
- 7) 分詞構文。

## 参考文献

Blake, B.J. (1994); *Case*, Cambridge University Press, Cambridge.

コムリー, B. 松本克己・山本秀樹 訳(1992); 『言語普遍性と言語類型論』, ひつじ書房

Palmer, F.R. (1994); *Grammatical roles and relations*, Cambridge University Press, Cambridge.

寺村秀夫(1982); 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版

角田太作(1991); 『世界の言語と日本語』, くろしお出版.

Whaley, L.J. (1997); *Introduction to typology: The Unity and diversity of language*, SAGE Publications Inc. California.